

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02863

研究課題名(和文) 大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは

研究課題名(英文) Developmental Evaluation Targeting Japanese Language Education Program at University Level: What is the Sustainable and Useful Developmental Evaluation?

研究代表者

小澤 伊久美(Ozawa, Ikumi)

国際基督教大学・教養学部・課程上級准教授

研究者番号：60296796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学の日本語教育部門における開発型評価(Developmental Evaluation: DE)が有効に機能したことを事例により示した。当事者らは評価疲れを感じることなく、DEによる学びと実践を日本語教師の個人的・組織的な学びとして肯定的に受け止めていた。DE実践は螺旋的な学びの場を提供していること、構成員が流動的な組織でも機能している可能性があることもわかった。結論として、効率良い評価スケジュール、タイムリーで負担の少ない形での知識やスキルの提供、DE実践による日本語教育専門家としての能力向上の実感が、日本語教育における持続可能で有用なDE評価の要因であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

開発型評価(Developmental Evaluation: DE)は複雑で流動的な現代社会での有用性が指摘されているが日本では研究や実践が非常に少なく、特に日本語教育分野では管見では本研究チームの取り組みしかない。本研究は、DEの意義や活用の実際をDEの具体的実践の紹介とともに社会に発信する貴重な事例となった。また、DEの継続的実践が評価疲れを起こさず、むしろ日本語教育専門家としての力量形成になると当事者が感じていること、何が持続可能で有用なDEの実践を支えているかを明らかにしたことに学術的意義がある。研究期間中に講演会等を開催したことはDE啓蒙や専門家集団形成という社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Through a case study, this study demonstrates the effectiveness of Developmental Evaluation (DE) in a university Japanese language education program.

In the case study, the parties did not feel evaluation fatigue, and they positively accepted the learning and practice by DE as personal and organizational learning of Japanese language teachers. The case study showed that DE practices provided a spiraling learning environment and could work in an organization with a fluid membership. In conclusion, the study indicated that an efficient evaluation schedule, the provision of knowledge and skills in a timely and less burdensome manner, and a sense of improvement in Japanese language teaching professional competence through DE practice are factors for sustainable and useful DE evaluation in Japanese language education programs.

研究分野：日本語教育

キーワード：発展的評価 開発型評価 大学 日本語教育 持続可能 プログラム評価

1. 研究開始当初の背景

日本語教育部門は大学の国際化推進の一翼を担っているが、その貢献が評価され、運営に活用されることはなかった。また、適切な評価を行うには、評価設計の妥当性を担保し、評価結果の活用を可能にする基盤を関係者らの間に構築する必要があった(小澤・丸山・池田 2015)。一方、日本語教育部門は、多様な要因が複雑に絡み合い、流動的な状況でダイナミックな運営が求められており、静的な目標と指標を定めて取り組む従来型評価ではなく、組織の発展を促すために取り組む開発型評価 (Developmental Evaluation: DE) (Patton 2011) が有効だと考えられた(小澤・丸山・池田 2016)。しかし、DE の実践は少なく、長期に実践した場合に評価疲れを起こさないか、組織の発展を促し続けるかは解明されていなかった。

2. 研究の目的

大学の日本語教育部門において DE を継続的に実施し、DE の意義と有効性、持続可能な DE 実践の要因を明らかにすることを目的とした。また、DE は日本語教育以外を含めても具体的な報告が少なく、実践者が参照できる資料等が少ないため、DE 実践者に役に立つ事例を提示することも目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、研究期間全体を通して調査対象プログラムに、DE の研修なども定期的に行いながら DE を実践した。そして、プログラムの様子を定点観測し、組織的な発展、発展への DE の貢献を分析した。評価チームには内部評価者・外部評価者の両方が入る形を取った。

上記のデータに加え、当事者らへのインタビュー、専門家らの意見聴取を行い、DE を持続可能で有用な形で実践するための要因を分析した。

組織の発展のありようを分析し、表現するための手法として複線径路等至性アプローチを援用し、考察した。

4. 研究成果

(1) DE の有用性

本研究は、大学の日本語教育部門における開発型評価 (Developmental Evaluation: DE) が有効に機能したことを事例により示している(小澤他 2020、丸山 2021、KUJI-SHIKATANI et al. 2021 など)。それらの中では、初めに上記組織における DE の実践とはどのようなことを事例に基づき紹介している。

DE には特定の実施方法があるわけではなく、評価の目的を、複雑なシステムの中で活動する組織のイノベーションを支援することを特徴としている。従って様々な実践の仕方があるが、本事例の全体像は下図のように捉えられる。

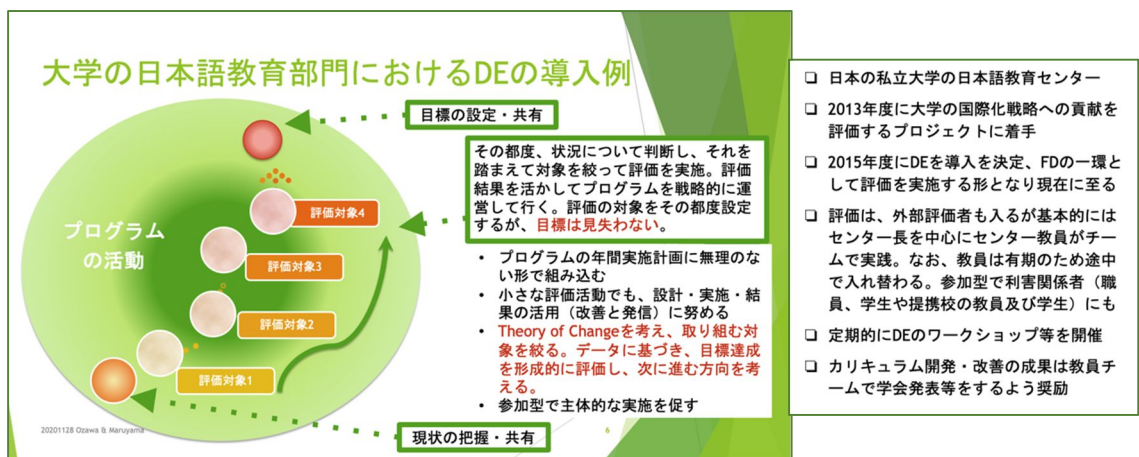


図1 大学の日本語教育部門における DE の導入例 (出所: 小澤・丸山 2020)

上図にあるように、まず、組織の発展の目的・目標、それに対して現状はどうかを当事者で検討し、共有した。その上で、両者を踏まえた時に取り上げる評価の対象と目的を設定し、その評価実践について適切な評価の設計・実施・結果の活用のプロセスを考え、実行に移した。目標の達成についての評価は、想定した発展・変容のセオリーが観察されているかを形式的に評価するために実施し、その結果を踏まえて、目標に向けて組織の活動が進むように必要に応じて仲介するかを検討した。

評価の対象はその都度設定していくが、大きな目標を見失わずに一連の評価活動がデザインされるように留意した。この DE の実践は当事者らが主体的に実施しており、外部評価者は、定

期的に問いかけや情報の整理などをする、研修を実施して DE 実践に必要な知識やスキルの習得を促す関わりをする、といった形で内部実践者を支援する関わりが主となった。

本実践の各評価対象については個々に具体的に報告しており（藤田他 2020、藤田他 2019、藤田他 2018 など）その中で DE を実践したことにより組織が目標としていた方向に発展し、成果が出たことが示されている。また、本研究期間全体を通して組織が複雑に生起する状況変化に対応しつつ、自らにとって望ましい方向に変容していた（丸山 2021）。

DE の実践は北米を中心に広がっているが、新たに実施しようと考えた時に評価者や評価対象となる側にとってわかりやすい事例は限られており（Patton et.al.2016, Gamble et.al. 2021 など）日本語教育の分野では管見では本研究チーム以外の実践の取り組み自体が見られない。一方で、DE の講演会や研修には関心を寄せる参加者が多いため、上記実践は DE の意義や活用の実際を社会に発信する貴重な事例となっていると言えるだろう。

ただし、DE の実践を第三者に向けて公開する上では難しさがあつた。発展途中の組織の課題に深く入って組織のイノベーションを促すことが DE の強みの 1 つであるが、その性質上、当該組織にとっては外部に公開しにくい内容も多々存在する。外部評価者は守秘義務の遵守を前提に評価に入るため、評価活動を進める上では問題がないが、結果の公開には制限がある。本研究では、DE により発展する組織のありようについて複線径路等至性アプローチを用いて様相を分析したり変容を可視化したりすることを試みたが、内部で分析に用いるに留まった。今後は、表現の抽象度を変えるなど、引き続き工夫を試みたい。

（2）DE が成功し、持続可能になるための要因

小澤・丸山（2020）では、DE を継続的に実施した上記事例において、DE 実践を持続可能にする要因を分析した。まず、評価学の領域では、評価を実践する側に「評価疲れ」が見られることが評価を事前可能とすることを阻む大きな要因であることが知られている。しかし本事例では、DE を実践したプログラム当事者らが、評価疲れを感じることなく、DE を学び、実践することが日本語教師としての個人の学び、そして、組織的な学びとなっていると肯定的に受け止めており、持続可能な DE 実践にとって大きな課題をクリアしていることがわかった。また、DE 実践が螺旋的な学びの場を提供していること、構成員が流動的な組織であるものの、どの構成員にも毎回吾が事として DE 実践を意味づけている可能性が見てとれた。

評価疲れを感じにくい環境作りについては、評価活動が日常的スケジュールに埋め込まれていて効率が良いこと、知識やスキルの提供がタイムリーで負担の少ない形であること、さらに DE の実践により自分自身の専門家としての能力が高まっていると感じることが重要な要因であることを明らかにした。つまり、本事例では、DE の実践によりプログラムも発展し、それに伴って構成員である教員集団も成長していくという関係性があつたと言えるだろう（下図参照）。

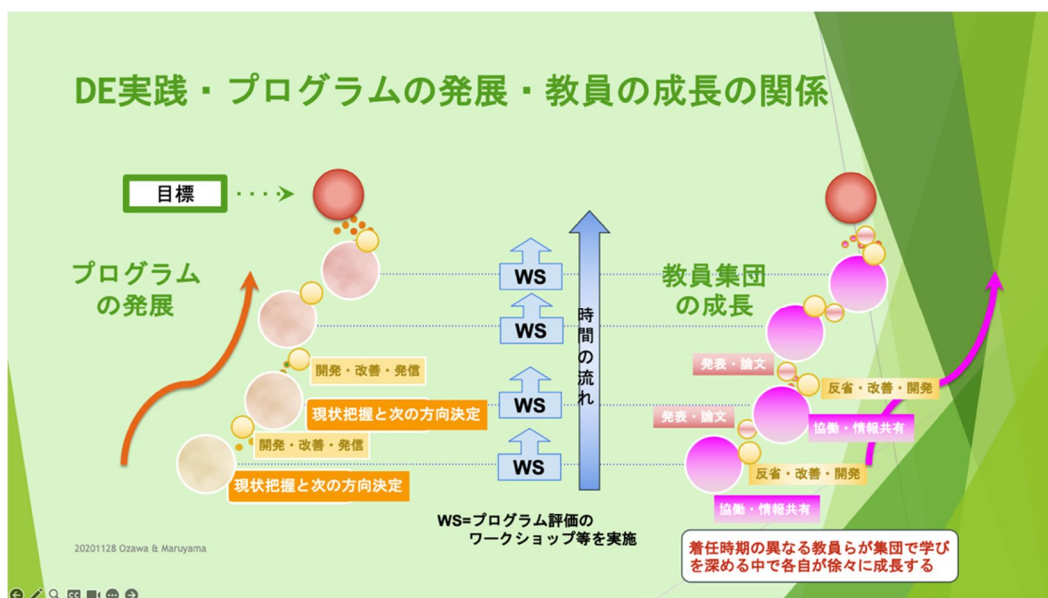


図2 DE 実践・プログラムの発展・教員の成長の関係（出所：小澤・丸山 2020）

本研究の上記事例の当事者のために企画した研修や講演会の一部は、関心のある人が広く参加できるように一般公開の形態で開催した。これらは DE の啓蒙や専門家集団形成につながり、時代の要請に応える社会的意義があつたと考えられる。

< 引用文献 >

Gamble, J., McKegg, K. & Cabaj, M (2021) *Developmental Evaluation Companion*, he J. W.

- McConnell Family Foundation (今田克司 監 『DE Companion ~ 発展的評価の旅のおと
もに~』ブルー・マーブル・ジャパン、2022年)
- KUJI-SHIKATANI, K., ROWE, W., HASHIMOTO, A., MARUYAMA, C., OZAWA, I., BORNER,
M., BELZER, A., & JIOURDAIN, T. (2021) "Learning as you go: Becoming part of the
solution as a Blue Marble Evaluator navigating the pandemic" The Blue Marble Evaluation,
March 29th, 2021, online. <[https://bluemarbleeval.org/latest/learning-you-go-becoming-
part-solution-blue-marble-evaluator-navigating-pandemic](https://bluemarbleeval.org/latest/learning-you-go-becoming-part-solution-blue-marble-evaluator-navigating-pandemic)>
- Patton, M. (2011). *Developmental Evaluation: Applying Complexity to enhance innovation and
use*. New York: Guilford Press.
- Patton, M., McKegg, K., & Wehipeihana, N. (2016) *Developmental Evaluation Exemplars:
Principles in practice*. New York: Guilford.
- 小澤伊久美・丸山千歌・池田伸子(2015). 「日本語教育プログラムの大学国際化への貢献を評価
する際の課題」『ICU 日本語教育研究』11,31-41.
- 小澤伊久美・丸山千歌・池田伸子(2016). 「日本語教育プログラム運営における開発型評価活用
の意義と可能性」『日本語教育実践研究』3, 20-31.
- 小澤伊久美・丸山千歌(2020)「組織的な学びを促す評価：大学日本語教育部門構成員への聞き
取り調査から」『日本評価学会第21回全国大会』
- 小澤伊久美・丸山千歌・札野寛子・長尾眞文・久慈恵子(2020)「日本語教育におけるプログラム
評価の意義」2020年度日本語教育学会春季大会、一橋大学、2020年5月30日
- 丸山千歌(2021)「発展的評価を用いたプログラム評価の活動」、小澤伊久美・丸山千歌・札野寛
子・長尾眞文・久慈恵子(2021)『シンポジウム日本語教育におけるプログラム評価の意
義』2021年3月6日、オンライン開催
- 藤田恵・金庭久美子・数野恵理・嶋原耕一・池田伸子・丸山千歌(2018)「開発型評価を取り入
れた日本語教育プログラム評価の実践 新規開講の漢字クラスを対象に」『ヴェネツ
ィア2018年日本語教育国際研究大会、2018年8月4日
- 藤田恵・金庭久美子・丸山千歌(2019)「短期日本語プログラムの授業実践と展望 「成果発表」
の指導における課題と改善への取り組み」『日本語・日本語教育』、99-109
- 藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌(2020)
「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応:2020年度
の立教大学日本語教育センターの取り組み」『日本語・日本語教育』4、1-20

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 丸山千歌・小澤伊久美	4. 巻 5
2. 論文標題 多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチのための試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00021384	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Jaana Valsiner, Teppei Tsuchimoto, Ikumi Ozawa, Xiaoxue Chen & Kikuko Horie,	4. 巻 -
2. 論文標題 The Inter-modal Pre-Construction Method (IMPreC): Exploring Hyper-Generalization	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Human Arenas	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s42087-021-00237-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 丸山千歌・小澤伊久美	4. 巻 4
2. 論文標題 日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 日本に住み、働きつづける日本留学経験者Cの場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00020631	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 池田伸子	4. 巻 4
2. 論文標題 オンラインによる日本語学習支援活動を通じた学びに関する質的研究 KJ法による自由記述の分析を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00020630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌	4. 巻 4
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応 :2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00020629	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田伸子	4. 巻 3
2. 論文標題 21世紀における日本語教育センターの役割 多文化共生社会の実現を目指して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00019406	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田恵・金庭久美子・丸山千歌	4. 巻 3
2. 論文標題 短期日本語プログラムの授業実践と展望 「成果発表」の指導における課題と改善への取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語・日本語教育	6. 最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00019412	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 丸山千歌	4. 巻 388
2. 論文標題 学内リソースを生かした日本語サポートの設計 「オール立教」の取り組みが留学生へのメッセージ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学時報	6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山千歌	4. 巻 6
2. 論文標題 Can-do statements を活用した教育実践の質的向上と教師教育	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語教育実践研究	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌・サトウタツヤ
2. 発表標題 縦断的調査におけるTEM的飽和に関する試論
3. 学会等名 立命館大学人間科学研究所 2021年度人間科学研究所年次総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 サトウタツヤ (企画)、土元哲平・市川章子・杉本菜月 (話題提供)、小澤伊久美・ウォーカー泉 (コメンテーター)
2. 発表標題 TEAの最新動向; 展結・関係学・イマジネーション
3. 学会等名 対人援助学会第13回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸山千歌・小澤伊久美
2. 発表標題 多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチ
3. 学会等名 母語継承語バイリンガル教育学会2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌・ サトウタツヤ
2. 発表標題 間モード再構築法としてのPAC分析
3. 学会等名 2020年度人間科学 研究所年次総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Teppei Tsuchimoto, Taiyo Miyashita, Ikumi Ozawa, Tomono Takao, and Jaan Valsiner
2. 発表標題 Semiotic Cultural Psychology and New Development of TEA
3. 学会等名 The 4th Transnational Meeting on TEA (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Taiyo Miyashita, Teppei Tsuchimoto, Ikumi Ozawa, Taeko Kamikawa, Takuya Sotta, Chihiro Tanaka, Takao Tomono, Naoko Yokoyama, and Jaan Valsiner
2. 発表標題 Ask the author on "An Invitation to Cultural Psychology"
3. 学会等名 The 4th Transnational Meeting on TEA (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ikumi Ozawa
2. 発表標題 Meaning-making through doing Auto-TEM and unraveling the imagination vis-a-vis COVID-19 crisis
3. 学会等名 The 4th Transnational Meeting on TEA (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
2. 発表標題 組織的な学びを促す評価：大学日本語教育部門構成員への聞き取り調査から
3. 学会等名 日本評価学会 第21回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikumi Ozawa
2. 発表標題 How imagination involves the transition of a teacher of Japanese-language vis-a-vis COVID-19 crisis
3. 学会等名 The Kitchen Seminar
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美・上川多恵子・宮下太陽・鈴木美枝子・木戸彩恵
2. 発表標題 イマジネーション理論がひろげる「発生の三層モデル」の可能性
3. 学会等名 日本質的心理学会 第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮下太陽・小澤伊久美・上川多恵子・卒田卓也・田中千尋・伴野崇生・横山直子・滑田明暢
2. 発表標題 ヤーン・ヴァルシナーの「AN INVITATION TO CULTURAL PSYCHOLOGY」を読む 文化心理学の理論的背景とスコープ
3. 学会等名 日本質的心理学会 第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美
2. 発表標題 コロナ禍にある大学教員のライフの転機に関する考察 発生の三層モデルとイマジネーション理論による図式化の試み
3. 学会等名 日本質的心理学会 第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikumi Ozawa
2. 発表標題 Teaching Japanese Remotely in COVID-19 Crisis
3. 学会等名 Showcasing of Responses to the COVID-19 Crisis at ICU
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌・札幌寛子・長尾眞文・久慈恵子
2. 発表標題 日本語教育におけるプログラム評価の意義
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ikumi Ozawa, Michiko Itou, Naoko Yokoyama, Kiyoka Shigetoshi, and Tatsuya Sato
2. 発表標題 How COVID-19 crises affect Higher education in Japan: An exploratory research by university instructors
3. 学会等名 THE PSYCHOLOGY OF GLOBAL CRISES: STATE SURVEILLANCE, SOLIDARITY AND EVERYDAY LIFE (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
2. 発表標題 PAC分析入門
3. 学会等名 小出記念日本語教育研究会主催ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko KUJI-SHIKATANI, Wendy ROWE, Akihiko HASHIMOTO, Chika MARUYAMA, Ikumi OZAWA, Megan BORNER, Andrealisa BELZER, and Tessa JIOURDAIN
2. 発表標題 Learning as you go: Becoming part of the solution as a Blue Marble Evaluator navigating the pandemic
3. 学会等名 The Blue Marble Evaluation(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 数野恵理・丸山千歌
2. 発表標題 パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価 立教大学の取り組みー
3. 学会等名 2020 年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会 オンライン国際セミナー・ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美
2. 発表標題 よりよい学校づくりのための評価って？
3. 学会等名 ICUHS教え人フォーラム 第11回ミーティング
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美
2. 発表標題 評価的思考 (Evaluative Thinking) で教育実践を考えるととは？
3. 学会等名 母語継承語バイリンガル教育学会インターナショナルスクール部会オンライン茶話会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
2. 発表標題 評価的思考を生かしたプログラム運営 内部評価者育成の重要性
3. 学会等名 沖縄日本語教育研究会第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丸山千歌
2. 発表標題 Can-do statementsを活用した教材開発と教師教育
3. 学会等名 2019年全国日本語骨干教師論壇 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤伊久美・橋本昭彦・石田健一・高林友美・鄭廣姫
2. 発表標題 学校評価士は学校運営における評価的思考の利用を いか に支援できるか
3. 学会等名 日本評価学会第20回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田伸子
2. 発表標題 多様な正規学部留学生受け入れにおいて日本語教育（センター）の果たすべき役割
3. 学会等名 立教大学日本 語教育センターシンポジウム 2018（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田恵・金庭久美子・数野恵理・嶋原耕一・池田伸子・丸山千歌
2. 発表標題 開発型評価を取り入れた日本語教育プログラム評価の実践 新規開講の漢字クラスを対象に 」
3. 学会等名 ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山千歌
2. 発表標題 これからの教師教育 開発型教師を目指して
3. 学会等名 2018 年全国高校日語系主任及日語骨干教師論壇（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田伸子
2. 発表標題 短期日本語プログラムからみる日本語教育(センター)の可能性
3. 学会等名 立教大学日本語教育センター シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 池田伸子、川崎晶子、高橋里美、ロン・マーティン、丸山千歌、森（三品）聡美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 先の見えない現在 人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える （立教大学異文化コミュニケーション学部研究叢書）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語教育とプログラム評価研究会 https://sites.google.com/view/evaluation-jpn/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池田 伸子 (IKEDA NOBUKO) (30294987)	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授 (32686)	
研究分担者	丸山 千歌 (MARUYAMA CHIKA) (30323942)	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授 (32686)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------